中等教育コース（国語教育専攻)、「日本語学特講」

新「学習指導要領」への対応を目指した遠隔同期型授業「日本語学特講」

国語教育講座・佐藤栄作

１　授業の基本情報

報告するのは､学校教育教員養成課程の｢日本語学特講」である。対象学年は３年、カリキュラム上の位置づけとしては､｢日本語概説」（１年)､「日本語研究」(３年前期）の後、３年後期開講であり、４年対象の「日本語学演習」を受講しない場合は、この授業が日本語学の授業としては最後となる。

2020 年度の受講生は、中等国語 6 名、小学校サブコース 14 名の 20 名。いずれも中学国語免許の取得を目指していると思われる。

２　授業の内容

授業名は「日本語学特講」であるが、特殊な課題を取り上げるのではなく､｢日本語の語彙・意味」についての講義と演習を合わせた内容である。本年度は、新学習指導要領を意識して、次の２点をこの授業の目標とした。

① 受講生自身が｢主体的･対話的で深い学び」を体験する授業。

② 「主体的･対話的で深い学び」を生徒に体験させられる国語科教員となるために役立つ授業。

本年度は、コロナ対応で、15 回全て遠隔同期型（zoom）で実施した。

15 回のうち、10 回は講義、5 回は分担課題の発表だった。講義の 10 回は、事前にムードルにパワポ･資料とワークシートをアップし、授業後にワークシートを提出する形態とした。提出されたワークシートを読んで、発展・補足を次の週までにアップした。

5 回は､受講生自身が興味を持った同義語･類義語について意味・用法の違いを調べて発表した。発表資料を共有し、発表後、質疑応答の時間を設け、授業後、質問カードを提出してもらった。提出された質問カードは発表者ごとにまとめて、発表者へ送り、最終的に提出する「修正版」のための資料にするよう指示した。

３　授業評価の内容

教育コーディネーターによるＤＰ対応の学生アンケートの結果を用いて学生の授業評価とする。調査は、最終回の授業で実施する予定だったが失念したため、それより後に就学支援システムで学生に通知した｡回答が 20 名中 12 名だったのはそのためだと思う。

学生アンケートの結果（質問は短くした）

問　知識・理解（専門的知識の修得）
　とても　６名　　ある程度　６名

問　技能（技能の修得）
　とても　３名　　ある程度　９名

問　思考・判断・表現（考え、表現できる）
　とても　３名　　ある程度　８名
　無関係　１名

問　興味・関心・意欲（教師として…）
　とても　３名　　ある程度　８名
　あまり　１名

問　課題や予習・復習の時間数
　0.5ｈ２名　1ｈ６名　1.5ｈ１名　2ｈ３名

問　その他、時間外学習の時間数
　0ｈ６名　　0.5ｈ２名　　1ｈ４名

問　自発的に読んだ本や論文の数
　0 本７名　　１本２名　２本２名　６本１名

問　自発的活動の数
　0 件 11 名　　90 件１名(入力ミスだろう)

問　この授業の新学習指導要領への対応
　十分６名　　一部５名　　不明１名

４　総括

遠隔授業だったが、学生の発表はできた。ただし質疑応答への参加者が固定化してしまった。学生にとっては、国語資料室が使えなかったので、発表資料作成がしづらかったに違いない。『日本国語大辞典』が大学図書館のＨＰから引けることを伝えたが、十分に活用できてはいなかった。

アンケート結果から。自ら決めた類義語について調べて発表するという活動が、「主体的・対話的で深い学び」に当たるという狙いはおおよそ実現できたと考える。ただし、いずれの項目も、「とても」「十分」は半数以下であり､本年度での達成は十分とはいえない。発表への助言をさらに充実させれば、受講生中心の「深い学び」が実現できると感じている。言葉を分析することの面白さを知った教員になってもらうため、改善していきたい。